想い出すままに

京都大学名誉教授　野　中　泰二郎

50周年史に一文を寄せるよう依頼を受けたので，防災研究所での経験を想い出すままに記す。今後活躍される方々に少しでも参考になれば幸いである。

応用研究の場である当研究所にありながら，基礎研究を遂行することにやや躊躇いを感じつつ35年が経過し停年を迎えてしまった。しかし，国際学術誌に掲載された論文を通じてDisaster Prevention Research Institute の存在を海外に知らしめる等，多少なりとも貢献できたのではないかと思う。研究所の改組・拡充の過程で，耐震構造から耐震塑性構造，そして地震災害の各研究部門へと所属が変わったが，常に地震と関わってきた。今振り返って最も印象深いのは阪神・淡路大震災である。被災地に赴き，破損構造物の中に以前とは異なる破壊形式が含まれていることに気がついた。揺れた後に倒壊したと思われる通常の被害の他に，大きな力が瞬時に作用した際観察される構造被害も存在したのである。

正にこれが，米国留学以来私が関心を抱いてきた問題の‘衝撃的破壊’である。力学的な観点に立ち基礎研究を積み重ねて来た事によってこそ，この点に着眼できたのだと思う。私は直下地震特有のこの様な破壊作用を早急に究明し対策を立てることが防災研究の最重要課題の一つと考え，衝撃問題に造詣の深い，機械・航空・土木・造船など他分野の研究者や技術者の協力を得て研究会を立ち上げ世にその重要性を喚起したところ，潤沢な科学研究費と共に小規模ながら衝撃試験装置を得ることができた。停年間際のこの経験は，地震衝撃の究明に生涯を捧げよとの天の声と心得，精進してゆく所存である。甚だ微力ではあるが後世に繋げていければと切に願う。研究面での回顧録は年報に掲載される予定なので，これ以上は省く。

京都大学本部では国際交流委員を４年間務めた。それまでの経験を活かし国際交流の促進に貢献したいとの意欲に燃えていたが，力及ばず任期が終わってしまったのは残念でならない。

海外生活は留学時代を含めると計６年程になろうか。60年代初めの留学はともかくとして，80年代にはオーストラリア，南アフリカ，そしてイスラエルに先方の基金による招聘教授として滞在した。その当時の国際社会におけるわが国の立場を考えると甚だ肩身の狭い思いをした。今では，科学研究費等の資金も増え，外国人学者の招聘にも援助が得られやすい状況になったが，未だ十分とは云えないので，今後後輩諸氏のご活躍を期待したい。

愉しかった想い出に，何年度か記憶にないが総長杯テニス大会で防災研究所の優勝に一役買ったときのことや，テニスに加え，囲碁のお手合わせ，宇治構内マラソン大会等があるが，それらを通じて宇治キャンパスの多くの方々と今も続くご厚誼を得ることができた。心から感謝している。

最後に，防災研究所の益々のご発展を衷心より祈念申し上げ，筆を置く。